シンポジウム総括

三本 智哉
国際交流基金　派遣専門家
モンゴル・日本人材開発センター

基調講演の田口真奈先生からは「日本語教育におけるコースデザイン　ICT教育の展開と教師の役割」というご発表とその後の質疑応答を通じて、「探求的学習のサイクルと教師の役割、授業のデザインの4要素、オープンコンテンツの現状と教材としての活用」といったことを学ぶことができました。

その後の3つのご発表では、「モンゴルの高等教育機関における日本学（学士）コース・デザインの現状」、「モンゴルの初中等教育における日本語コースデザインと、オンライン授業への考え」、「モンゴル国における語学センターの日本語教育の現状」がそれぞれ具体的に確認出来たかと思います。

ここまでの総括として言えることは、程度の違いこそあれ、ここにいるほぼ全ての日本語教師がコロナ禍のなかでオンライン授業を実施してみて、様々な課題と戦いながらも一定の手ごたえや技能の向上を自身に感じたのではないでしょうか。世界的に徐々に対面授業が行える状況に戻りつつある今日というこの日において、モンゴルの日本語教育関係者と一緒になって考えたいのは、「モンゴルの日本語教育におけるこれからのICTの活用」であり、特に「コースデザイン」「授業デザイン」「学習者の自主性・自律性」という方面から知恵を出し合い、共有、協働していければと期待しています。

以下にそれらの３つについて、考えるポイントを挙げていきます。

1つ目の、コースデザインについて：①目的の明確化：目標と評価はサンドイッチの関係、目的がどの程度達成されたのかを妥当な測定法を追及する。目標のCan-doが話すことなのにパフォーマンス試験をしていないのでは？　学期末だけでなくトピック毎に形成的評価を行い、教授・学習プロセスを見直す。　②授業時間内と授業時間外の効果的な組合わせ：反転授業による応用練習やアウトプット時間の確保、会話動画を提出させることで学習者一人ひとりを授業時間外に評価できる（自己評価や学習者間評価ができる、後で見返すことができる）。　③オンデマンド教材の活用（「いろどりオンライン」などの利用・共同作成）

2つ目の、授業デザインについて：①「学習環境／ インプット ／ アウトプット ／ FB（フィードバック）／ 評価」の5つのポイントから自分自身の授業を見直す。ICTの活用によって効果があるのはどこだろうか。　②学習者の実態やニーズに合わせる（スマホしかないなら、スマホ前提で考える）。教師主体ではなく学習者主体。教師は学習者の学習の協力者。

③目的を持ってICTが得意なところで活用する。目的や意図が無いのに取りあえずICTを使うのはやめる。不得意なところでは活用しない。動画や画像による動機付け、データの保存や分析は得意。日本や他の国のクラスと自分の日本語クラスをつなぐ取り組みでモチベーションやアウトプットの機会を創出する。

3つ目の、学習者の自主的・自律学習能力を育むについて：①学習の中で徐々に自主的・自律的になるような仕組みを考える。教師だけを情報源とはせずに、動画や音声、友達からの情報を自ら集める。集めた情報から自分や友達同士で文法ルールを考える。自分にとって必要なことばや会話は何かを意識させる。自己評価の機会を作る。　②足場かけと足場外しによる、「 21世紀型の学習者」への育成。現在、自主的自律的ではない学習者は待っていてもそのままである可能性が高い。教師からの動機付け、問いかけ、サポート、励ましなどは必要だが、徐々にそれを無くしていく意識を持つ。

これらの点について、「自分の学習にとって大切な課題はどれか、取り組んだことのある事例、解決のために良さそうなアイディア」などをお近くの先生方で話し合って共有しましょう。（この後、参加者同士で話し合いを行い、3名から発表してもらった）